

アメリカにおける最近のグループワーク研究の動向

— 過去5年間の文献レビューより —

福 島 喜代子

1 はじめに

日本において社会福祉士や介護福祉士の資格が制定されて10年目を迎え、社会福祉士を中心としたソーシャルワーカー（以下、ワーカーとする）には、より専門性の高い技術や方法論などの知識と技能の習得が求められている。中でもケースワークやグループワークはその専門性のコア（芯）となる援助技術であり、日本の大学教育の中では主に「直接援助技術各論」と題された課目の中で教えられている。周知のように、ケースワークやグループワークはもともとアメリカで生まれ、日本に紹介されたものである。そのアメリカでは、大学の学部レベル及び大学院の1年目の教育で *generalist approach*⁽¹⁾ をとり、グループワークの方法論や技術を学び、技能を身につけることが、社会福祉を学ぶ者全てに課せられている。また、社会福祉の現場ではソーシャルワーカーがグループを対象に援助する場面がますます増えている。⁽²⁾ アメリカのこれまでの研究の流れ⁽³⁾ 及び最近の研究の動向を把握することは、これからの日本における社会福祉研究の方向性、課題などを考察する上で大いに参考となろう。

本稿では、アメリカにおける最近のグループワーク研究の動向を探るために、The Haworth Press の発行する “Social Work with Groups”⁽⁴⁾ に過去5年間（1993年～1997年（16巻1/2号～20巻2号））に掲載された（「詩」の形式のみで記された論文1本を除いた）104本の論文の文献レビューから、最近のグループワーク研究の傾向を概説したい。“Social Work with Groups” は、アメリカで1955年にNational Association of Social Workers (NASW) を設立するためにそれまでのソーシャルワーカー関係諸団体が統合されたり、大学院教育課程

での方法論の統合がなされた後、1978年にグループワーク独自の研究発表の場の必要性から発刊された権威ある専門誌であり、本誌の内容は、ほぼアメリカにおけるグループワーク研究の動向を反映しているといえよう。この文献レビューから、今後の日本におけるグループワーク研究の方向性と課題についても考察したい。

2 “Social Work with Groups”の文献レビューからみた最近のアメリカのグループワーク研究の傾向について

アメリカにおける社会問題の多様さを反映して、グループワーク研究の対象となっているグループワークの利用者及び利用者の抱える課題は多種多様である。また、グループワーク研究が進むにつれ、グループワークの方法論や技法などに関する特定の課題の研究もさまざまになされている。ここではまず、論文を分類した項目とそれぞれの項目ごとの論文数を示し、続いて全体の傾向を概説したい。

1) テーマからみた論文の分類

“Social Work with Groups”の104本の論文は、利用者を明確に特定しているグループワークの研究論文74本と、それ以外の、グループワーク教育のあり方、方法論や技法などの課題についての研究論文30本に分けられた。

(1) 利用者を明確に特定している論文

利用者を明確に特定している74本の論文を利用者ごとに分類し、論文数の多い項目順に整理すると以下の表のようになった。

利 用 者	論文数
(1) 家族や介護者	10
(2) 司法福祉関係者	8
(3) 精神障害者（薬物依存者を除く）	7

アメリカにおける最近のグループワーク研究の動向

(4) 子ども	6
(5) 性的虐待の被害者	6
(6) ホームレスやホームレスに近い状態の人々	6
(7) HIV 陽性,あるいはAIDS 患者	6
(8) その他の病気を患っている人々	5
(9) 高齢者	5
(10) 薬物（アルコールを含む）依存者	5
(11) 多人種,多民族の混合,相互理解グループ	5
(12) 知的障害者,身体障害者	3
(13) 企業,地域の女性	2
合 計	74

(2) 方法論や技法その他に関する研究論文

方法論や技法その他に関する研究論文を整理すると,以下の表のようになった。

テ ー マ	論文数
(1) ソーシャルワーカーの役割,行う作業,用いる援助技法	8
(2) グループワーク教育のあり方	6
(3) 政策や団体の意思決定の過程とグループワークの関係	4
(4) コミュニティワークやソーシャルアクションとグループワークの関係	4
(5) グループワークのモデルや展開過程の一般論	2
(6) その他の研究	4
合 計	30

以上の分類項目ごとに個々の論文の要点は後述する。

2) グループワーク研究の傾向や特徴

続いて,全体の文献レビューから折出されるグループワーク研究の傾向や特

徴を筆者なりに整理し、(1)サービスの利用者、(2)利用者の抱える課題とサービス目標、(3)グループワークの構造、(4)ワーカーの用いる技法、担う役割、行う作業、(5)グループワークの研究手法、(6)関連領域との関係についての研究の6項目に分けて整理してみたい。

(1) サービスの利用者について

(ア) 利用者を明確に特定化する傾向がある

(例：「知的障害者」ではなく、「親しい者を失った知的障害者」と特定するなど)

(イ) 家族や介護者を利用者とするグループが多い

(ウ) 参加が義務づけられている利用者のグループが多い

(例：性犯罪者や妻へ暴力を振るった者のグループなど)

(エ) 積極的な働きかけをして、自発的に参加しない者を利用者としたグループもある

(例：ホームレスコミュニティーに入りこみ、スポーツグループを形成するなど)

(オ) 多人種、多民族の混合したメンバーが利用者であるグループもかなりある

(2) 利用者の抱える課題とサービス目標について

(ア) 課題と目標を細分化する傾向がある

(例：「両親が暴力を振るうのを目撃した経験のある子どもたち」に、「暴力以外の問題解決方法を獲得させること」を目的とするグループなど)

(イ) 心理、情緒面など精神保健分野の課題と目標を取り上げたものが多い

(例：中年女性が「老いに適応する」ためのグループなど)

(3) グループワークの構造

(ア) 期間を限定するものが多い

(始めから終了時期をはっきりさせて開始するグループが多い)

(イ) 短期化の傾向がある (6週程度のグループワーク研究が多い)

(ウ) 構造化されたプログラムを用いるグループワークが多い

(エ) グループ構造を展開させるグループワーク研究がある

(例：ワーカーが関わる短期間の構造化されたプログラムのグループワークの後、メンバーによるセルフヘルプグループに移行する形態など)

(オ) 対面的ではないグループワークが出現している

(例：電話のカンファレンスコールや、インターネットの掲示板の利用など)

(4) ワーカーの用いる技法、担う役割、行う作業について

(ア) 認知行動療法を用いているものが多い

(イ) 心理教育的アプローチを用いているものが多い

(ウ) 数はそれほど多くはないが、芸術療法、回想法などの技法を用いているものがある

(エ) ワーカーの役割を明確にする必要性を強調したものが多い

(オ) ワーカーの個々の介入や作業を具体的、理論的に認識し、実行できる必要性を強調したものが多い

(5) グループワークの研究方法

(ア) 援助過程を客観的に把握する努力がされている

(例：ビデオ録画やテープ録音)

(イ) 援助過程や結果を客観的に分析する手法が用いられている

(例：content analysis を行うなど)

(ウ) 客観的な効果測定をしようとする努力がなされている

(例：介入前後の調査で効果測定を行い、検定や分散分析（ANOVA）を行うなど）

(6) 関連領域との関係についての研究

(ア) グループワーク方法をコミュニティワークへ応用する研究がある

(イ) ソーシャルアクションを指向したグループワークについての研究がイギリス、南アフリカ、オーストラリアなどから報告されている

(ウ) 政策や団体の意思決定過程などにグループワーク方法を応用する研究がある。

以上のように、最近のグループワーク研究の傾向や特徴を筆者なりにまとめた。

3 利用者を明確に特定しているグループワークの研究の動向

利用者を明確に特定している研究論文は前述した表に示されるように、多領域にわたっているが、以下に個々の論文の要点をまとめた。

1) 家族や介護者が利用者であるグループワーク研究

対応困難な問題を抱えている本人のみでなく、その家族、あるいは介護者など特定の家族員を利用者としたグループワーク及びその研究は多種多様に行われている。(なお、ここにはHIV陽性やAIDSを患っている者の家族を利用者としたグループワークの研究論文3本を含まず、これらは(6)でとりあげている。)

McKay et al. (1995) 及び Meezen, O'keefe & Zariani (1997) の研究は、比較的新しいアプローチである Multiple Family Group Therapy (以下MFGT) の実践報告である。McKay et al. (1995) は、このモデルを示すと同時に、その臨床的な長所とワーカーの挑戦課題を示し、Meezen, O'keefe & Zariani (1997) は、他の伝統的な家族療法（1家族ずつワーカーと面接する）を受けた人々のグループとの比較調査を行い、MFGTによるほうが虐待再発の可能性が少な

く、親子の関わり方が改善されるなどの有意性のある差を確認している。

ワーカーの果たした役割や作業に重点をおいた研究では、母親を対象に親業を習得してもらうためのグループワークで、ソシオグラムなどを用いて記録を分析した結果、ワーカーが対人交流をうまく促進しないグループではグループがうまく展開しないと指摘する研究 (Sullivan, 1995) や、娘や息子の代わりに子育てを再びせざるをえなくなった祖母たちのサポートグループの計画、実施過程で、ワーカーが組織や地域との関係で果たす役割を分析した研究 (Cohen, 1995)、精神障害をもつ人の兄弟や成人した子どものためのサポートグループの開始時に、ワーカーが参加をためらっている者に参加を促すことの意義を強調した研究 (Walsh, Hewitt & Loderee, 1996) がある。

アフリカ系アメリカ人が抱える問題に焦点をあてた研究では、アフリカ系アメリカ人の父親を対象としたセルフヘルプグループのリーダー養成グループと、6週間のセルフヘルプグループのセッションをビデオ録画し、content analysisで分析したり (Fagan & Stevenson, 1995)、児童福祉システム (虐待などの問題を抱える家族の関わるシステム) に関わるアフリカ系アメリカ人の家族に、文化的背景や人種特有の問題や課題に考慮したグループワークのプログラムを実践した研究報告 (Miller, 1997) がある。

また、Parker, Hutchinson & Berry (1995) は、湾岸戦争の最中に、兵士たちの家族を対象に10カ月にわたり実施したサポートグループの実践で、メンバーの強い感情の表出にワーカーが的確に対応した様子を報告し、Forte, Barrett & Campbell (1996) は、家族など身近な人を失って哀悼している人々のための、1カ月に2回の自由参加のグリーフグループの中で、「ソーシャルネットワーク」の地図を書き上げる活動を行い、グループ参加前の状態の回想と現在の状態の比較から、グループ参加によって、ネットワークに肯定的な変化がみられることを認識させた。Bentelspacher et al. (1996) は、シンガポールで、精神障害者を抱えたアジア系の家族を対象に、心理教育的アプローチを用いたサポートグループの展開過程を分析し、アジア系になじみにくいと筆者が指摘する3つの課題 (契約、自己開示、対応技能訓練) に焦点をあて、効果的な介入方法

の実践報告をしている。

2) 司法行政，司法福祉施設などに関連したグループワーク研究

刑務所，矯正保護施設，少年院など，司法福祉の領域におけるグループワークの報告も多い。認知行動療法をもとにした技法を用いたグループワーク研究では，少年院で，グループ，家族，入所施設内の3つの設定場面で並行してチームで認知行動療法プログラムを実施した実践報告（Rose et al., 1996）や，保護観察部署の職員と大学の社会福祉学部の教員が共同で開発したモデルについての計画段階からの実践報告と，「権威」の適切な使い方や相互援助の促進の仕方などに焦点を置いた研究（Goodman, 1997）がある。

Wright (1993)は，矯正保護施設の入所者と職員で構成する小さな単位がいかに「家族的」であるかを分析し，安全で受容的な雰囲気づくりがいかに入所者の「再」社会化に役立つかを強調している。また，King (1993)は，親しい家族や友人と離れ離れになっている服役者がそのつらさを克服することを目的として開発した構造化された6週間のプログラム（毎回テーマをきめ，15分講義をしてから，全員で討議するという形式）を効果的に行った実践報告をしている。

性犯罪を犯した者を対象にしたグループでは，青年を対象にした7つのグループとワーカーを対象に並行して行ったスーパービジョン会議で表出してきた課題（孤独感，飽き，束縛感，コントロールへの不安など）を分析した研究（Etgar, 1996）や，男女ペアのチームでリードしたグループにおけるメンバー及び女性リーダーの「女性がリーダー役を務めたこと」への感じ方や受け止め方を，インタビュー結果を分析，報告した研究（McCallum, 1997）がある。

夫婦（恋人）間の暴力（ドメスティックバイオレンス）の加害者のためのグループワーク研究では，Nosko & Wallace (1997)が男女ペアのチームで効果的にグループをリードする時の留意点を報告し，Caplan & Thomas (1995)は，4つの概念（安全，居心地の良さ，内容及び過程）の分析と具体的な介入技法を描写している。

3) 精神障害者が利用者であるグループワーク研究

精神障害者（ここでは薬物依存者を含まず⁽¹⁰⁾でとりあげている）が利用者であるグループワークの研究論文は7本あった。Day Treatment Center（通所施設）における研究では、メンバーがさまざまな偏見（個人的、普遍的、永久的な）にうまく対処できるように援助することを目的として認知療法を実施し、メンバーが外交的になるなどの副次的効果を観察した研究（Albert, 1994）や、多様な人種や民族のメンバーが利用するグループの中で、認知力が弱い人々が参加しているときには、人種差別に根差したグループ内の葛藤に対してワーカーが強いリーダーシップを持って対処しなければならないことを失敗例を交えながら論述した研究（Dowds, 1996）がある。また、外来患者を利用者としたグループワークで、Fairchild (1995)は、産後に精神病を発症した女性を対象としたグループの実践（計画から終了後のアンケート結果まで）を報告し、参加者から得たアンケートへの肯定的な回答や提言をその後のプログラムの改善にも役立てた様子を報告している。

入所施設（病院ではない）における研究では、Potocky (1993)が、入所者の社会生活技能の向上を目的として、絵画療法とゲシュタルトセラピーを取り入れた週1回のプログラムを実践し、表現がより豊かになり、対人交流が活発になるなどの変化がみられた結果を報告しており、一方、Schnekenburger (1995)は、自身に任せられた週1回のグループの時間の中で、試行錯誤の末、グループ全体で詩を創作するに至った過程を描写している。

なお、Lynn & Nisivoccia (1995)は、社会生活技能の向上と、対人交流を促進するために、精神障害者を対象としたグループでできるだけプログラム活動を活発に行っていくことの必要性を論述し、その具体的な展開モデルをグループの展開過程に沿って提示している。また、Satterley (1995)は、平均在院期間の短いアメリカで、入院患者を利用者としたグループワークのモデルが、これまで外来患者を対象に発展してきたグループワーク（セラピー）のモデルを一部修正したものとしてしか提示されてこなかったことを反省し、今後、入院患者の特性に応じた新しいモデルを構築していくことの必要性を説いている。

4) 子どもが利用者であるグループワークの研究

子どもが利用者であるグループワーク研究は6本あり、子どもたちが抱える課題を特定して工夫を凝らした実践と研究がなされている。夫から妻への（父親から母親への）暴力を間近にみた子どもたちが利用者であるグループワークでは、5～7歳の子どもを対象に、葛藤を経験しても暴力以外の方法で対処できる力をつけるために「お話しクラブと心理劇（ごっこ遊び）」の形で行ったグループの実践報告（Tutty & Wager, 1994）や、これらの子どもには、教育的アプローチよりも、対人交流を促進し、グループの展開過程に沿ってワーカーがメンバーの個別の課題に対処していくアプローチのほうが効果的であることを分析した研究（Evans & Shaw, 1993）がある。

Fatout (1993)は、身体的虐待をされた子どもたちが参加する12週の構造化されたプログラムのグループで、凝集性を高める儀式、ロールプレイ、感情と行動を結び付ける遊びや活動、そして現実性検査（reality testing）などの重要性を強調している。カナダに移民してきた子どもたちのためのグループについて報告しているのがGlasgow & Gouse-Sheese (1995)で、「拒絶」や「放棄」などの課題の分析と、援助時に留意すべき点を提示している。

またPeters (1997)は、同性愛の青年たちのためのグループワークの中で重要な孤独、coming out、正しい知識習得の3つの課題を分析している。Malekoff (1994)は、一般的に、青年期の子どもを対象としたグループワークの中で重要な5つの要素（ユーモア精神、エゴチェック、言動不一致（矛盾）の理解、自身の子ども時代の回想、そして人格全体をみて子どもとかかわること）について整理、分析している。

5) 性的虐待の被害者が利用者であるグループワーク研究

過去に性的虐待を受けた被害者が利用者であるグループワークの研究も6本ある。Finn (1995)及びFinn & Lavitt (1994)では、インターネットの掲示板を利用した、性的虐待の被害者を対象にしたセルフヘルプグループのパイロットスタディの報告がなされている。いずれも、利点（利用しやすい、依存性の拡

散、話しやすいなど）と欠点（リーダーの不在、表面的な自己開示、孤独感の増長）などが論述され、今後のさらなる研究（特に利用者の満足度や効果）の必要性が強調されている。

Knight (1993) は、男女混合の被害者のためのグループの実践報告をし、Reid, Mathews & Liss (1995) は、男性のみの、被害者と、同性愛のパートナーが性的虐待の被害者である者のためのグループの実践報告をしている。また、Groves & Schondel (1996) は、女性の同性愛カップルで、いずれかが被害者である場合に参加できるフェミニストアプローチをベースにしたサポートグループの実践報告をしている。

de Jong & Gorey (1996) は、過去に実施された性的虐待の被害者のためのサポートグループの効果の調査結果の比較を行い、短期、長期にかかわらず、4分の3のグループは効果的であったとの結果が得られ、6カ月後もその効果が持続したことが3つの研究で把握されたこと、そして長期と短期のグループ間ではその効果について有意の差がみられなかったことなどを報告している。

6) ホームレスやホームレスに近い状態の人々が利用者のグループワーク研究

ホームレス、あるいは昼間路上で生活する人々（夜間はシェルターや廃屋を利用）が利用者のグループワーク研究も6本報告されている。Pollio (1994) の研究は、廃屋の中でstreet persons（ホームレスあるいはホームレスに近い状態の人々）とともに過ごしたひと冬の経験と、それぞれの人生の描写や彼らの間の役割分担やルールの実践分析をしている。また、Goldberg & Simpson (1995) は、伝統的なグループワークには適さない規模とされる40人前後の薬物依存等のホームレスの人々を利用者として、ワーカーがリードする大グループとホームレスの人々の間でリーダー役も担ってもらい小グループ活動を組み合わせるという工夫をして行ったグループワーク活動の実践報告をしている。Pollio, McDonald & North (1995) は若いstreet personsを対象にしたバスケットグループの展開の中で、ワーカーがいかにエンパワメントや相互援助を意識して援助していったかについて分析、報告し、Hardman (1997) は、ロンドンにおける

子どもを持つ売春婦を対象にした心理教育的アプローチを取り入れた10週間の構造化されたプログラムのグループワークの実践報告をしている。

Cohen (1994) は、コミュニティの中でホームレスの人々が利用者であるグループ活動の展開過程にそって、メンバーの中でリーダーの役割を担うものがどのように変化していったかの描写をしつつ、ワーカーが非指示的なグループ活動を円滑に進める「推進役」に徹することの重要性を強調している。また、Pollio (1996) は、strengths based approach (個人の長所を最大限に引き出すことを主眼としたアプローチ) と feminist theory (個人のエンパワーメントと社会活動を行うことに焦点をあてた援助理論) を組み合わせた援助方法で street persons のコミュニティでグループワークを展開するときのワーカーの役割や基本姿勢について「共働していく」ことの重要性を強調しながら整理している。

7) HIV 陽性や AIDS を患っている人々が利用者であるグループワーク研究

HIV 陽性や AIDS を患っている人々やその家族のためのグループの研究も 6 本ある。(なお、家族が利用者である場合のグループワーク研究も、その抱える課題が本人と家族とで重複し、特定しやすいため、(1)に分類せず、こちらの項目に分類整理した。)

Getzel & Mahony (1993) は、1986年以来毎週行ってきたエイズを患っている 27 人の同性愛の人々のためのサポートグループの実践の中から、個々の直面する問題がグループの展開過程の中でどのように取り扱われてきたかについて描写し分析している。Greene, McVinney & Adams (1993) の報告では、「エイズ特有の症状が現われる以前の人のみ」が参加できる HIV 陽性の人々のためのグループで、メンバーの発症にどのようにグループが対処していったか、リーダーの介入の仕方 (共感、同一視の感情の強化、怒りの社会へ向けての表出、的確な対処方法の確認など) を具体的に分析、描写している。Subramanian, Hernandez & Martines (1995) は、HIV 陽性のラテン系の母親のための、短期のプログラムが構造化された心理教育的グループの実践報告をしながら、メンバーの集め方、計画のたて方、文化的に考慮すべき課題などについても描写し

ている。

家族が利用者であるグループワーク研究では、患者の介護者のための8回のサポートグループを電話のカンファレンスコールを利用して行った実践報告 (Meier, Galinsky & Rounds, 1995) や、身近な人を亡くした人々のための open-ended (参加や終了の自由な) のグリーフグループの実践報告と、この方法でグループワークを行うことの利点と欠点の分析 (Amelio, 1993), 患者である子ども, その兄弟, 親と養父母, 祖父母それぞれのグループを電話のカンファレンスコール (1度に何人もと通話ができる制度を利用しての会議形式の電話) でつなぎ, 4~6セッション実施した実践報告とともに, 「孤独感」「グループの有用性」について前後に行った調査結果を報告し, 1週間後も, 6ヵ月後もグループの体験の有用性が確認されたことを報告した研究 (Wiener et al., 1993) がある。

8) その他の病気を患っている人々が利用者であるグループワーク研究

その他 (HIV 陽性や AIDS 以外) の病気を患っている人々が利用者であるグループワーク研究も5本あった。ガン患者のためのサポートグループでは Weinberg et al. (1995a) がコンピューターを媒介にしたサポートグループの利点と欠点の考察と, このようなグループの立ち上げ方を描写し, Weinberg et al. (1995b) ではグループの持つ力について同グループの利用者に調査を行い, このようなグループでも, Yalom の指摘した11の therapeutic factors の中から選択して調査した普遍性, 凝集性, 希望をもたらすの3項目は認識されたが, 愛他性の項目は認められなかったことを報告している。Stein, Rothman & Nakanishi (1993) は, 多発性硬化症で家に閉じこもりがちな患者を利用者として電話のカンファレンスコールを利用したサポートグループを6週間にわたって実施し, 利用者に孤独感からの解放などの効果が現われたと報告している。

また, Kramer & Nash (1995) は米国で123ある Sickle cell disease (主にアフリカ系アメリカ人に発症する貧血症) の患者のためのグループを, エコロジカル理論に沿って分析し, メンバーやコミュニティの環境の違いによってグルー

プそのものも異なってくることを指摘し、長期の質的調査をエコロジカル理論に則って行うことの有用性を強調している。

Glaichen & Magen (1995) は、The Brief Symptom Inventory の項目を介入前後で ANOVA (分散分析) を用いて分析した結果、患者自身のグループよりもその家族のグループや配偶者を亡くしたグリーフグループにおける数値のほうがより大きい肯定的変化がみられたとの結果を報告している。

9) 高齢者が利用者であるグループワーク研究

高齢者が利用者であるグループワークの研究論文では、孤立化している高齢者を利用者としたグループの内容の変遷 (心理教育的グループから社会的、そしてセラピーグループへと変化) の過程を描写した研究 (Ryan & Doubleday, 1995) や、アルツハイマーによる痴呆の高齢者を、痴呆の程度により 3 グループに分け、軽度の者には回想法を中心に、重度になるほど作業的、工作的なプログラムを中心に工夫した短時間 (25分前後) のグループワークの内容の実践報告 (Gladstein, 1993)、元ソーシャルワーカーである自身が参加したグループ (配偶者を失った高齢女性のための哀悼グループ) におけるメンバーとしての葛藤の経験とグループの展開過程の観察結果を描写した研究 (Adolph, 1996)、老人ホーム入所者の配偶者を利用者として実施した10回の構造化されたプログラムによるセッションのあと、グループメンバーが自らセルフヘルプグループを形成して展開していった過程を描写した研究 (Brennan et al., 1996) がある。

そして、McCallion & Toseland (1995) は、虚弱老人の介護者のサポートグループの文献レビューで、介護者のサポートグループを 4 つ (相互援助型、心理教育型、社交及びリクリエーション型、サービス提供及び権利擁護型) に類型化し、これまでの調査では相互援助型と心理教育型が介護者の社会的、心理的、身体的負担の軽減に効果的である結果が示されていると指摘し、今後は、どのようなタイミングで介護者をグループに紹介するべきかなどが研究課題であると指摘している。

10) 薬物（アルコールを含む）依存者が利用者であるグループワーク研究

薬物（アルコールを含む）依存者が利用者であるグループワークの研究論文では、Fisher (1995) は、精神病と薬物依存の双方を患っている人々（いわゆる Dual Diagnoses の人々）を対象に、認知行動療法と、Disease and Recovery Model（病気一回復モデル）の2つのモデルについてその基本的な考え方、人間行動の認識、目的、ワーカーやメンバーの役割を対比分析し、それぞれの理論にもとづいたプロトコル（計画案）を提示している。

Jones (1996) は、薬物依存者が利用者であるプログラムで、プログラム終了時によく行われる「卒業式」の儀式についてとりあげ、その中で出現してくる家族との関係などの課題についてワーカーがいかに効果的に介入し、再転落の防止に役立てることができるかについて実践報告している。高齢の薬物依存者が利用者であったグループで Kostyk (1993) は、専門家であるワーカーの他に、peer co-leader（回復者でリードする役割も担う者）がリードするグループの効果（希望、楽観、役割モデルを示す）について報告している。

Rhodes (1995) はアルコール依存症の親を持つ思春期前の子どもたちを対象とした心理教育的アプローチによるグループの中で、3点（感情の認識、問題解決過程の理解、薬物依存に関する正しい知識の習得）に重点を置いた実践活動の効果について報告している。そして、Efron & Moir (1996) は、アルコール依存症の親を持つ成人した子ども（いわゆるアダルトチルドレン）を対象とした6回の構造化されたプログラムによるグループワークの展開過程、ワーカーの介入方法について描写、報告している。

11) 多人種、多民族の混合グループや相互理解を目的としたグループワーク研究

多民族国家であるアメリカやその他の国々において、近年、多人種や多民族のメンバーが参加するグループワークのあり方や、お互いを理解し、建設的に交流するためのプログラムづくりなどが重要な課題になっている。自分の異文化への偏見の認識力を高めるための心理教育的アプローチを用いたプログラム

の中で、他の文化的背景を持つ者のグループとの共通点を見い出し、分かちあう過程などを強調しながら報告した研究 (Rittner & Nakanishi, 1993) や、多様な人種や性別の者で構成されたグループを差別的でなく運営するためのワーカーの介入技法について描写、分析した研究 (Brown & Mistry, 1994) が報告されている。Schopler et al. (1996) は、社会福祉学部の学生のために多人種、多民族のメンバーが参加するグループにおいてワーカーに必要なRAP (認識, 予測, 問題解決) 作業の技能を会得するために開発したワークショップのモジュールを紹介するとともに、参加した生徒の認識の変化について行った介入前後とフォローアップテストの結果をANOVAで分析し、ワークショップに参加することによって生徒の知識、技術、やりやすさが向上したとの結果を報告している。

Bargal & Bar (1994) は、イスラエルでアラブ系とユダヤ系の青年たちを対象に行った、相互信頼、合意、交渉を通してお互いを理解しあい、葛藤を軽減させるための3日間のワークショップの内容を詳細に整理、分析して報告し、また、Drower (1993) は、南アフリカにおける、多様な人種と交流するための女性の会合の記録から、グループワーク方法が個人及び社会に同時に働きかける効果を持ち得る様子を描写、分析している。

12) 知的障害者及び身体障害者を対象にしたグループワーク研究

知的障害者や身体障害者を対象としたものは合わせて3本であった。Glassman & Kates (1993) は、若い身体障害者とともに“outing (お出かけ行事)”として、メンバーがワーカーとともに緊張しながら街のはやりのバーに出かけた経験を描写し、グループの心理社会的目的を達成するためにワーカーに必要な5つの技術 (プログラム計画、役割げいこ、フィードバック、直面化, group reflexive consideration (グループに反映させながら思考していくこと) について分析、検討している。知的障害者を対象としたグループワークの研究論文2本 (Rothenberg, 1994; Waite, 1993) のうち、Rothenbergは、仲間を突然失った、地域に暮らす知的障害者のために、危機介入のモデルに基づい

て、儀式、絵画療法、個人面談と組み合わせて8週間のグリーフワーク（哀悼グループ）を実施したプログラムの実践報告をしている。Waite (1993)は、対象者の理解力に応じて内容をかみ砕いて分かりやすく表現するなどの工夫をしながら心理劇の技法を用いて、3つのこと（社会生活技能の学習、自己評価を高め、自信を持つこと、感情の自由な表現をして落ち着いた立ち居振る舞いができるようになること）を目的として行ったグループワークを実践報告している。

13) 企業やその他の人々が利用者であるグループワーク研究

企業でのグループワーク研究は、Gladstone & Reynolds (1997)が、職場環境の大きな変化に直面してストレスを感じている従業員を対象に、1回きり、3時間のグループワークを実施し、メンバーがストレッサーを認識し、理解し、機能的な対処方法を身につけられるように援助することがワーカーの役割であり、管理職との関係づくり、守秘義務などに特別な配慮が必要であると指摘している。また、地域の中年あるいは更年期の女性を対象にしたグループワークの研究をしたMcQuaide (1996)は、女性が年を重ねていくことについて肯定的なイメージを持てるようにすることを目的とした短期間の構造化されたプログラムによるグループワークの実践を、計画時の留意点も含めて詳細に報告している。

4 方法論や技法、その他の研究論文の動向

方法論や技法、その他の研究論文は、前述の表であらわしたように幅広い領域にわたってさまざまなテーマをとりあげている。以下に個々の研究論文の要点を筆者なりにまとめた。

1) ワーカーの役割、行う作業、用いる技法についての研究

ワーカーの行う作業 (tasks) や用いる介入技法 (intervention techniques) については、Walsh & Hewitt (1996)が、精神障害者を対象にしたグループについてのモデルは多種多様にあるものの、ワーカーの作業や介入技法についての研

究が少ないことを指摘し、自らはそのことに焦点をあてて議論し、グループの中で、対人交流と相互援助を促進させ、メンバーが成長できるような介入技法のあり方を検討している。また、Schopler & Galinsky (1995b) は、グループワークの中でのワーカーの作業 (tasks) がこれまで (1) 目的達成にむけての作業と (2) グループの維持についての作業を中心に論じられていたのに対して、第3の作業として boundary spanning (グループの境界線を広げる) 作業をあげ、ワーカーはグループとそれを取り巻く環境の仲介役も担うべきであると提言している。Duffy (1994) は、グループワークでよく用いられる check-in (チェックイン=グループ開始時に全員一回りして現在や前回の会合以降にあったことなどの報告をさせる) やその他の go-arounds (すべてのメンバーに意見や感想を順に述べさせる) の技法の長所及び欠点、そしてこれらを有効に用いる方法を分析している。また、Wodarski & Feit (1994) は、グループにおける reinforcers (強化) のあり方についてまとめている。グループ内での特に好ましい行動に対しては、時間をおかず、適切に、一貫性をもって、平等に与えるべきである、などをまとめて考察している。

Steinberg (1996) は、グループワークにおける時間の配分について、「平均的に」メンバー間で時間を配分することばかり気をとられるよりも、相互援助を促進し、メンバーの問題を共有し、援助することによって「充実した」時間を使えるように進行することを提言している。

ワーカーの役割については、Kurland & Salmon (1993) が、グループの中でワーカーが持つべきいい意味での権威的役割について、その示し方や技能を生徒に教える方法とタイミングについて描写、検討している。ワーカーの権威に関連する技法や作業として、Fatout (1995) は、子どもを対象にしたグループワークの中では、通常否定的にとらえられがちな limiting (制限を加える) や structuring (構造化する) などの技法そのものが子どもに対する empowering process (力づけていく過程) であることを分析している。逆の観点から、Bernstein (1993) は、クライアントに保障されるべき「自己決定権」が、参加を強制されているグループのメンバー (involuntary clients) からは奪われている

ことの再認識をもとに、ワーカーが、制限のある中、メンバーの選択権を尊重し、メンバーが自ら変わっていく媒介になっていく技法や方法について、実例を交えながら分析している。

2) グループワークの教育に関する研究

グループワークをどのように教授するか、学生はどのようにグループワークの技能を身につけるかなどの研究も重要な課題として研究されている（6本）。まず、授業内容などについて、Strozier (1997)は、アメリカの51の社会福祉学部 of 大学院におけるグループワークの授業の教授方法、授業内容、使用教科書について講義要綱などの資料から分析し、半数以上のコースで学生が実際にグループメンバーとなる経験をする「体験的教授法」が実施されていると報告している。Berger (1996)は、グループワークの教授方法について、さまざまな方法論の分析から、理論も経験もない学生に対しては、まず教室形式での授業、次に経験的な参加をし、実際の現場のグループの観察し、そして最後にリーダー経験をするという順番が好ましいという結論を導きだしている。

Steinberg (1993)は、大学院カリキュラムの中で3科目以上グループワークに関する専門の授業を受けた者と、それ以外の者として実際の現場での実践内容に違いがあるか否かについて、インタビュー内容を比較分析した。コントロール、葛藤への対処や時間の捉え方について、教育内容の差による差異がみられた。また、Knight (1997)は、グループワークの大学院における教育についての調査を大学院生を対象に行い、授業の内容、実習先での経験の度合、そして実習中の指導体制など、今後さらなる工夫が必要であると提言している。Stempler (1993)は、実習先のスーパーバイザーと実習生が共に学びあえ、成長できるようにグループの共同進行（運営）の仕方について、グループの展開過程と並行してスーパーバイザーと実習生の関係づくりも行っていく様子を整理、分析している。そして、Cohen & Garrett (1995)は、グループワークの実習中に使用できる記録の様式を考案し、それを使用した学生と実習指導者を対象にした調査（5ポイントのライカートスケールを使用）の結果を分析（平均

値の比較) し、この形式の一定の有用性を報告している。

3) 政策や団体の意思決定の過程とグループワークの関係に関する研究

政策や団体の意思決定の過程などをグループワークに関連づけて論じている論文もかなりある。Imbrogno (1993)は、社会政策の形成過程において、グループワーク方法と *critical theory*の方法をとりいれ、対立した意見を持つそれぞれのグループに対して、情報提供、意見表明する自由と機会、議論する場を与えることなどにより、高い次元での合意形成（弁証法的合意形成）をする方法論の形成を試みている。Ephross & Vassil (1993)は、法人の評議委員会、理事会あるいはスタッフ会議などの「作業グループ」の過程やその効果的な運用について検討し、今後さらにグループワーク方法を用いる研究をしていくことを提言している。Ramey (1993)は、エンパワーメント指向のソーシャルワーク実践の一環として、自分たちの利用しうる資源の配分のされ方などの意思決定に参加できる力を与えるために、クライアントが、政策や規則の決定のためのルールとして標準化されている *Robert's Rules of Order Revised* を学び、シュミレーションしてみることを勧めている。

Noran (1996)は、団体や機関の意思決定をグループに委ねる管理形式の危険性と留意点をまとめている。また、Reisch (1993)は、伝統的に政治活動を直接行わない傾向が強かったソーシャルワーカーが近年、選挙のスタッフや政治家そのものとして政治活動を行うときに、いかにグループワーク方法がその活動に資するか、主な作業、用いる技法などを展開過程に沿って分析している。Mullender & Ward (1993)は、イギリスで開発された *self-directed group work approach*（社会活動を指向し、治療的要素をあまり持たない介入技法を用いたアプローチ）を行うグループに対するワーカーのコンサルタントとしての役割と作業について分析している。

4) グループワークとコミュニティワークやソーシャルアクションとの関係の研究

グループワーク方法を、コミュニティワークの中で生かすことやソーシャルアクションなどと組み合わせることによる効果を論じた研究論文も複数あった。Brown (1993) は、グループワークとグループを取り巻く環境の関係を、システム理論を用いて分析し、ワーカーがいかに周りのシステムの中でキーパーソンを見い出し、働きかけるかが重要であることを指摘し、グループワークとコミュニティオーガニゼーションとの統合理論の構築の可能性を探ることを提言している。Breton (1994) は、エンパワーメントを指向した社会福祉実践に必要な要素の定義づけと分析から、エンパワーメント指向の実践のためには、ワーカーがグループワークとコミュニティワークの方法を組み合わせる用いることが重要であると指摘している。Breton は1995年の論文で、グループワークのメンバーを対象にグループワークの一環として社会活動（ソーシャルアクション）やエンパワーメントを実行可能ならしめるための前提条件を整理し、分析している。

Bailey (1993) は、周りのコミュニティの変化に危機感をもった教会が、教会づけのソーシャルワーカーを雇用し、そのソーシャルワーカーが社会福祉学部の実習生とともに行った複数のグループワークで、ワーカーが相互援助の促進とメンバーとの運営機能の役割分担を効果的に行った様子を実践報告をしている。

5) グループワークのモデル、展開過程に関する研究

グループワークの一般的なモデルとしては、Schopler & Galinsky (1995a) が、筆者自ら打ち出した open system models of support groups について、このモデルが一方でセルフヘルプグループと、もう一方で治療的グループと重なることを概説し、主要な概念（環境の条件、参加者の特徴、グループの条件、結果 (outcome)）の定義づけをしている。グループの展開過程については、Berman-Rossi (1993) が、グループワークの展開過程に沿ってこれまでに唱え

られてきた説を検討した上で、自身の5段階説を示し、それぞれのステージごとのグループ内のシステム、メンバーの行動、メンバーの合同的行動、ソーシャルワーカーの作業や技法を示している。

6) その他の研究

これまでの項目に分類するのが難しい4本の研究論文を最後に概観したい。Dolgoff & Skolnik (1996)は、ソーシャルワーカーがグループを対象に援助しているときに直面する倫理的な葛藤（どちらをとっても倫理的にひっかかる）場面を想定し、その場面での対処法を調査した結果、ワーカーは、ソーシャルワーカーの倫理綱領よりも自分の経験則から解決策を導きだす傾向があると報告している。Forte (1994)は、アメリカ合衆国以外で働いているソーシャルワーカーのグループワーク関連の論文を量的に分析し、それらのうち、グループワークの実践報告にとどまっているものも依然多いが、38%もの論文が、科学的知識の蓄積に資する論文であったと報告している。Ben-Ari & Azaiza (1996)は、イスラエルにおける社会福祉などの専門家を対象に「セルフヘルプ」の概念や例についてアンケート調査を行って分析し、自らセルフヘルプグループの概念を聞いたことのある専門家は、そうでない者に比べて、「相互援助」や「情緒的サポート」の意味を関連づけている結果となった。

なお、Berman-Rossi & Miller (1994)の論文は、104の論文中唯一の歴史的な研究論文で、アメリカにおける初期のセツルメント運動が主にヨーロッパからの移民のみを対象とし、いかにアフリカ系アメリカ人を無視し、疎外してきたかについて分析している。

5 日本における今後のグループワーク研究の方向性と課題

これまでアメリカのグループワーク研究の最近の動向をみてきたが、筆者自身の3年間のアメリカにおける体験と照らし合わせても、アメリカではグループワークの個別、具体的な研究が進み、多種多様な領域に活用されていることが印象づけられた。これらの文献のレビューによって示唆されるものは非常に多

いが、日本における現況を踏まえた上で、今後研究をする必要がある課題として、筆者としては以下のような点について述べてみたい。

1) グループワーク教育の研究を充実する必要がある

日本においては、現在、ソーシャルワーカーの養成が主に大学の学部レベルで行われているが、その教育、特に直接援助技術の技能の取得のさせ方について、研究を深めていくことが必要である。同時に、今後は、大学院レベルや現任研修で、グループワークの実践と理論を統合しながら学べるようなシステムのあり方が研究されることが望まれる。

2) グループワークサービスの目標を明確に特定する必要がある

今後は一層利用者や課題を明確に特定し、それに当てはまる人々が利用者となるグループワークを計画し、実施していくことが必要である。そして、個々のグループワークサービスの目標を、利用者の参加を得ながら明確に設定していくことが必要である。

3) グループワークのプログラムに工夫を加える必要がある

日本では、レクリエーションや自由な話し合いなどを主なプログラムとしたグループワークが非常に多いが、今後は、ニーズに応じて、構造化されたプログラムを組み、具体的な援助技法を用いて治療教育的な働きかけをすることなどが必要である。そして、日本文化に適したプログラムを工夫して行っていく必要がある。

4) ワーカーが個々の介入の理論と技能を習得する必要がある

ワーカーが、個々の介入を具体的、理論的に認識し、説明できるようになる必要がある。そして、グループワークを実施していく過程で、ワーカーがどのような役割を担い、どのような作業を行い、どのような技法を用いていくのが望ましいのかを具体的に研究していく必要がある。

5) グループワークの効果や過程を客観的に測定し、評価していくことが必要である

わが国では、直接援助に関する厳密な効果測定調査は非常に少ないが、今後は、グループワークの過程及び効果を客観的に把握し、測定していくためのさまざまな工夫を行い、量的及び質的な研究を行うことが必要である。

以上さまざまな課題をあげたが、いずれにしても、今後一層、社会福祉教育の現場と社会福祉実践の現場が共働して、より専門性の高いグループワークのあり方を研究していくことが必要である。

注

- (1) ソーシャルワーカーは幅広くケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガナイズーションなどの方法論の基本的な知識と技能を持ち、総合的にアセスメントや援助を行うことができるべきであるとし、それを目標とするアプローチ。(Barker, R. L (1995) The Social Work Dictionary (3rd ed.), Washington D. C.: NASW Press. p.147, 149)
- (2) Strozier (1997) "Group work in social work education: What is being taught?" Social work with groups, 20 (1), p.65.などで、実際の現場でグループワーク方法を用いることが増えていると指摘している。
- (3) アメリカの過去のグループワーク研究の動向をまとめた文献には、秋山智久、「ソーシャルグループワークの新しい方向—米国における5つのモデルを中心に—」、『ソーシャルワーク研究』1号(4), 1975年；大利一雄、「グループワークの潮流 I-V I」, 『ソーシャルワーク研究』9号, (1)～(4), 1983年；小山 隆, 「米国におけるグループワーク研究の動向」, 『地域福祉研究』17号, 1989年などがある。
- (4) Social group workとsocial work with groupsの違いについて論じている論文には、Middleman, R. R. & Wood G. G. (1990) "From social group work to social work with groups" Social work with groups, 13 (3), pp. 3-20 がある。

アメリカでは現在, "social group work" はほとんど使われず, "groupwork" 一語や, 専門誌の名称でもある "social work with groups", より新しくは, "group practice" の言葉で, グループを対象にした社会福祉援助のことをさして使用している。しかし, 本稿では, いずれも「グループワーク」に統一して表現した。

References

- Adolph, M. R. (1996) No longer an outsider: a social group worker as a client in a bereavement group for older women. Social work with groups, 19 (2), pp. 17-34.
- Albert, J. (1994) Rethinking difference: a cognitive therapy group for chronic mental patients. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 105-122.
- Amelio, R. C. (1993) An AIDS bereavement support group: one model of intervention in a time of crisis. Social work with groups, 16(2/3), pp. 43-54.
- Bailey, P. L. (1993) Social work practice with groups in the church context: a family life ministry model in an inner-city church. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 55-68.
- Bargal, D. & Bar, H. (1994) The encounter of social selves: Intergroup workshops for Arab and Jewish youth. Social work with groups, 17 (3), pp. 39-60.
- Ben-Ari, A. T. & Azaiza, F. (1996) Associated meanings of the concept "self-help" among Israeli professionals in the helping professions. Social work with groups, 19 (2), pp. 67-80.
- Bentelspacher, C. E. et al. (1996) A process evaluation of the cultural compatibility of psychoeducational family group treatment with ethnic Asian clients. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 41-56.
- Berger, R. (1996) A comparative analysis of different methods of teaching group work. Social work with groups, 19 (1), pp. 79-90.
- Berman-Rossi, T. (1993) The tasks and skills of the social worker across stages of group development. Social work with groups, 16(2/3), pp. 69-82.
- Berman-Rossi, T. & Miller, I. (1994) African-American and the Settlements during the late nineteenth and early twentieth centuries. Social work with groups, 17 (3), pp. 77-96.
- Bernstein, S. B. (1993) What happened to self-determination? Social work with groups, 16 (1/2), pp. 3-14.
- Brennan, F., Downes, D. & Nadler, S. (1996) A support group for spouses of nursing home residents. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 71-82.
- Breton, M. (1994) On the meaning of empowerment and empowerment-oriented social work practice. Social work with groups, 17 (3), pp. 23-38.
- Breton, M. (1995) The potential for social action in groups. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 5-14.
- Brown, A. & Mistry, T. (1994) Group work with 'mixed membership' groups: issues of race and gender. Social work with groups, 17 (3), pp. 5-22.
- Brown, L. N. (1993) Group work and the environment: a systems approach.

- Social work with groups, 16 (1/2), pp. 83-96.
- Caplan, T. & Thomas, H. (1995) Safety and comfort, content and process: facilitating open group work with men who batter. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 33-52.
- Cohen, C. S. (1995) Making it happen: from great idea to successful support group program. Social work with groups, 18 (1), pp. 67-80.
- Cohen, M. B. (1994) Who wants to chair the meeting? Group development and leadership patterns in a community action group of homeless people. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 71-88.
- Cohen, M. B. & Garrett, K. J. (1995) Helping field instructions become more effective group work educators. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 135-146.
- Dolgoft, R. & Skolnik, L. (1996) Ethical decision making in social work with groups: an empirical study. Social work with groups, 19 (2), pp. 49-66.
- Dowds, M. W. (1996) Paranoia in an ethnically-diverse population: the role of group work. Social work with groups, 19 (1), pp. 67-78.
- Drower, S. (1993) The contribution of group work in a changing South Africa. Social work with groups, 16 (3), pp.5-22.
- Duffy, T. K. (1994) The check-in and other go-rounds in group work: guidelines for use. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 163-176.
- Efron, D. E. & Moir, R. (1996) Short term co-led intensive group work with adult children of alcoholics. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 117-130.
- Ephross, P. H. & Vassil, T. V. (1993) The rediscovery of real-world groups. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 15-26.
- Etgar, T. (1996) Parallel processes in a training and supervision group for counsellors working with adolescent sex offenders. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 57-70.
- Evans, D. & Shaw, W. (1993) A social group work model for latency-aged children from violent homes. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 97-116.
- Fagan, J. & Stevenson, H. (1995) Men as teachers: a self-help program on parenting for African American men. Social work with groups, 17 (4), pp. 29-42.
- Fairchild, M. W. (1995) Women with postpartum psychiatric illness: a professionally facilitated support group. Social work with groups, 18 (1), pp. 41-54.
- Fatout, M. F. (1993) Physically abused children: activity as a therapeutic medium. Social work with groups, 16 (3), pp.83-96.
- Fatout, M. F. (1995) Using limits and structures for empowerment of children in groups. Social work with groups, 17 (4), pp. 55-70.

- Finn, J. (1995) Computer-based self-help groups: a new resource to supplement support groups. Social work with groups, 18 (1), pp. 109-117.
- Finn, J. & Lavitt, M. (1994) Computer-based self-help groups for sexual abuse survivors. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 21-46.
- Fisher, Sr., M. S. (1995) Group therapy protocols for persons with personality disorder who abuse substances: effective treatment alternatives. Social work with groups, 18 (4), pp. 71-90.
- Forte, J. A. (1994) Around the world with social group work: knowledge and research contributions. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 143-162.
- Forte, J. A., Barrett, A. V. & Campbell, M. H. (1996) Patterns of social connectedness and shared grief work: a symbolic interactionist perspective. Social work with groups, 19 (1), pp. 29-52.
- Getzel, G. S. & Mahony, K. F. (1993) Confronting human finitude: group work with people with AIDS. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 27-42.
- Gladstein, M. et al. (1993) The creative use of groups with Alzheimer's patients. Social work with groups, 16 (4), pp. 109-124.
- Gladstone, J. & Reynolds, T. (1997) Single session group work intervention in response to employee stress during workforce transformation. Social work with groups, 20 (1), pp. 33-50.
- Glajchen, M. & Magen, R. (1995) Evaluating process, outcome, and satisfaction in community-based cancer support groups. Social work with groups, 18 (1), pp. 27-40.
- Glasgow, G. F. & Gouse-Sheese, J. (1995) Themes of rejection and abandonment in group work with Caribbean adolescents. Social work with groups, 17 (4), pp. 3-28.
- Glassman, U. & Kates, L. (1993) Feedback, role rehearsal, and programming enactments: cycles in the group's middle phase. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 117-136.
- Goodman, H. (1997) Social group work in community corrections. Social work with groups, 20 (1), pp. 51-64.
- Goldberg, E. V. & Simpson, T. (1995) Challenging stereotypes in treatment of the homeless alcoholic and addict: creating freedom through structure in large groups. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 79-94.
- Greene, D. C., Mcvinney, L. D. & Adams, S. (1993) Strengths in transition: professionally facilitated HIV support groups and the development of client symptomatology. Social work with groups, 16 (3), pp. 41-54.
- Groves, P. & Schondel, C. (1996) Lesbian couples who are survivors of incest: group work utilizing a feminist approach. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 93-104.

- Hardman, K. L. J. (1997) A social work group for prostituted women with children. Social work with groups, 20 (1), pp. 19-32.
- Imbrogno, S. (1993) Small group dynamics and a dialectic discourse. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 137-152.
- Jones, D. M. (1996) Termination from drug treatment: dangers and opportunities for client of the graduation ceremony. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 105-117.
- de Jong, T. L. & Gorey, K. M. (1996) Short-term versus long-term group work with female survivors of childhood sexual abuse: a brief meta-analytic review. Social work with groups, 19 (1), pp. 19-28.
- King, A. E. O. (1993) Helping inmates cope with family separation and role strain: a group work approach. Social work with groups, 16 (4), pp. 43-56.
- Knight, C. (1993) The use of a therapy group for adult men and women sexually abused in childhood. Social work with groups, 16 (4), pp. 81-94.
- Knight, C. (1997) A study of MSW and BSW students' involvement with group work in the field practicum. Social work with groups, 20 (2), pp. 31-50.
- Kostyk, D. et al. (1993) Combining professional and self-help group intervention: collaboration in co-leadership. Social work with groups, 16 (3), pp. 111-124.
- Kramer, K. D. & Nash, K. B. (1995) The unique social ecology of groups: findings from groups for African Americans affected by Sickle Cell disease. Social work with groups, 18 (1), pp. 55-66.
- Kurland, R. & Salmon, R. (1993) Not just one of the gang: group workers and their role as an authority. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 153-170.
- Lynn, M. & Nisivoccia, D. (1995) Activity-oriented group work with the mentally ill: enhancing socialization. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 95-106.
- Malekoff, A. (1994) A guideline for group work with adolescents. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 5-20.
- McCallion, P. & Toseland, R. W. (1995) Supportive group interventions with caregivers of frail older adults. Social work with groups, 18 (1), pp. 11-26.
- McCallum, S. (1997) Women as co-facilitators of groups for male sex offenders. Social work with groups, 20 (2), pp. 17-30.
- McKay, M. M. et al. (1995) Multiple family therapy groups: a responsive intervention model for inner city families. Social work with groups, 18 (4), pp. 41-56.
- McQuaide, S. (1996) Keeping the wise blood: the construction of images in a mid-life women's group. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 131-144.
- Meezan, W., O'Keefe, M. & Zariani, M. (1997) A model of multi-family group therapy for abusive and neglectful parents and their children. Social work with groups, 20 (2), pp. 71-88.

- Meier, A., Galinsky, M. J. & Rounds, K. A. (1995) Telephone support groups for caregivers of persons with AIDS. Social work with groups, 18 (1), pp. 99-108.
- Miller, D. B. (1997) Parenting against the odds: African-American parents in the child welfare system—a group approach. Social work with groups, 20 (1), pp. 5-18.
- Mullender, A. & Ward, D. (1993) The role of the consultant in self-directed group work: an approach to supporting social action in Britain. Social work with groups, 16 (4), pp. 57-80.
- Noran, A. R. (1996) Avoiding the perils of management by groups: the contributions of Bion, Tavistock and social work theorists. Social work with groups, 19 (1), pp. 53-66.
- Nosko, A. & Wallace, R. (1997) Female/male co-leadership in groups. Social work with groups, 20 (2), pp. 3-16.
- Parker, S., Hutchinson, D. & Berry, S. (1995) A support group for families of armed services personnel in the Persian Gulf War. Social work with groups, 18 (1), pp. 89-98.
- Peters, A. J. (1997) Themes in group work with lesbian and gay adolescents. Social work with groups, 20 (2), pp. 51-70.
- Pollio, D. E. (1994) Wintering at the Earle: group structures in the street community. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 47-70.
- Pollio, D. E., McDonald, S. M. & North, C. S. (1995) Hoops group: group work with young "street" men. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 107-122.
- Pollio, D. E. (1996) Combining a strengths-based approach and Feminist Theory in group work with persons 'on the streets'. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 5-20.
- Potocky, M. (1993) An art therapy group for clients with chronic schizophrenia. Social work with groups, 16 (3), pp. 73-82.
- Ramey, J. H. (1993) Group empowerment through learning formal decision making processes. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 171-186.
- Reid, K., Mathews, G. & Liss, P. S. (1995) My partner is hurting: group work with male partners of adult survivors of sexual abuse. Social work with groups, 18 (1), pp. 81-88.
- Reisch, M. (1993) The social worker in politics as a multi-role group practitioner. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 187-202.
- Rhodes, R. (1995) A group intervention for young children in addictive families. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 123-134.
- Rittner, B. & Nakanishi, M. (1993) Challenging stereotypes and cultural biases through small group process. Social work with groups, 16 (4), pp. 5-24.

- Rothenberg, E. D. (1994) Bereavement intervention with vulnerable populations: a case report on group work with the developmentally disabled. Social work with groups, 17 (3), pp. 61-76.
- Rose, S. D. et al. (1996) Integrating family, group and residential treatment: a cognitive-behavioral approach. Social work with groups, 19 (2), pp. 35-48.
- Ryan, D. & Doubleday, E. (1995). Group work: a lifeline for isolate elderly. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 65-78.
- Satterley, J. A. (1995) Needed: a fresh start for psychiatric inpatient groups. Social work with groups, 17 (4), pp. 71-82.
- Schnekenburger, E. (1995) Waking the heart up: a writing group's story. Social work with groups, 18 (4), pp. 19-40.
- Schopler, J. H. et al. (1996) The RAP model: assessing a framework for leading multiracial groups. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 21-40.
- Schopler, J. H. & Galinsky, M. J. (1995a) Expanding our view of support groups as open systems. Social work with groups, 18 (1), pp. 3-10.
- Schopler, J. H. & Galinsky, M. J. (1995b) Boundary spanning and group leadership functions: the third dimension. Social work with groups, 18 (4), pp. 3-18.
- Stein, L., Rothman, B. & Nakanishi, M. (1993) The telephone group: accessing group service to the homebound. Social work with groups, 16 (1/2), pp. 203-213.
- Steinberg, D. M. (1993) Some findings from a study on the impact of group work education on social work practitioners' work with groups. Social work with groups, 16 (3), pp.23-40.
- Steinberg, D. M. (1996) She's doing all the talking, so what's in it for me? (the use of time in groups) Social work with groups, 19 (2), pp. 5-16.
- Stempler, B. L. (1993) Supervisory co-leadership: an innovative model for teaching the use of social group work in clinical social work training. Social work with groups, 16 (3), pp. 97-110.
- Strozier, A. L. (1997) Group work in social work education: what is being taught? Social work with groups, 20 (1), pp. 65-78.
- Subramanian, K., Hernandez, S. & Martinez, A. (1995) Psychoeducational group work for low-income Latina mothers with HIV infection. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 53-64.
- Sullivan, N. (1995) Who owns the group? The role of worker control in the development of a group: a qualitative research study of practice. Social work with groups, 18 (2/3), pp. 15-32.
- Tutty, L. M. & Wager, J. (1994) The evolution of a group for young children who have witnessed family violence. Social work with groups, 17 (1/2), pp.

89-104.

- Waite, L. M. (1993) Drama therapy in small groups with the developmentally disabled. Social work with groups, 16 (4), pp. 95-108.
- Walsh, J. & Hewitt, H. (1996) Facilitating an effective process in treatment groups with persons having serious mental illness. Social work with groups, 19 (1), pp. 5-18.
- Walsh, J., Hewitt, H. E. & Londeree, A. (1996) The role of the facilitator in support group development. Social work with groups, 19 (3/4), pp. 83-92.
- Weinberg, N. et al. (1995a) Computer-mediated support groups. Social work with groups, 17 (4), pp. 43-54.
- Weinberg, N. et al. (1995b) Therapeutic factors: their presence in a computer-mediated support group. Social work with groups, 18 (4), pp. 57-70.
- Wiener, L. S. et al. (1993) National telephone support groups: a new avenue toward psychosocial support for HIV-infected children and their families. Social work with groups, 16 (3), pp. 55-72.
- Wodarski, J. S. & Feit, M. D. (1994) Applications of reward structures in social group work. Social work with groups, 17 (1/2), pp. 123-142.
- Wright, M. M. (1993) Family-like group in a correctional institution. Social work with groups, 16 (4), pp. 25-42.